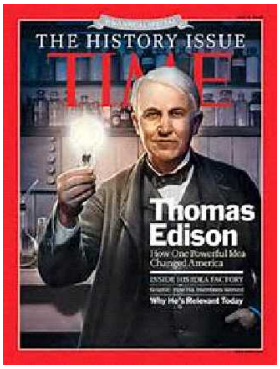
「生きた水が川となって」

（ヨハネ7:37～39）

挽地茂男

2020. 5. 24　日本基督教団千歳丘教会礼拝



トーマス・エジソンが聖書について次のような言葉を残しています。「光、暖かさ、健康、力はすでにもう存在しているのですから、スイッチを入れさえすればよいのです。電線そのものは別に何でもありません。絶縁された二、三本の銅線にすぎないのです。しかし、その線の中をプラスとマイナス二つの電流が流れると、すべてが変わってきます。暗黒は失せ、冷気はなくなり、仕事もたやすくできるようになります。聖書は単なる本にすぎませんが、神の御霊によって霊感されている聖書の各ページを、神の義と愛とが、プラス・マイナス二つの電流のように流れ、キリストの十字架で合流しています。聖書だけが、私たちに救い主を示してくれます。そのことによって聖書は、私たちの全生涯を造り変えることができる力の泉となるのです。あなたは誘惑にあい、疑惑と敗北と弱さに満ちたご自分の生活に倦み疲れてはいませんか。また、不安や心配にあきあきしてはいませんか。スイッチを入れなさい。聖書を読みなさい。」科学者の言葉として、驚きを感じます。真の科学者はあさはかに信仰を否定したりしません。

さて今日の聖書を読んでみましょう。それはユダヤの祭の終わりの日のことでした。主イエスの与えようとする恵みが、祭にことよせて語られます。それ(祭/恵み)は喜びをもたらすからです。この祭は、「仮庵祭(かりいおのまつり)」〔Sukkot(スコット)〕と呼ばれる秋の収穫祭で「水と光の祭典」とも呼ばれます。申命記１６章１３－１５節にこの「喜びの祭」についての規定があります。「16:13 麦打ち場と酒ぶねからの収穫が済んだとき、あなたは七日間、仮庵(かりいお)(=仮設の家)祭を行いなさい。16:14 息子、娘、男女の奴隷、あなたの町にいるレビ人、寄留者、孤児、寡婦(やもめ)などと共にこの祭りを喜び祝いなさい。16:15 七日間、主の選ばれる場所であなたの神、主のために祭りを行いなさい。あなたの神、主があなたの収穫と手

の業をすべて祝福される。あなたはただそれを喜び祝うのである。」〔【現在の仮庵祭/下写真】　ヨルダン川西岸（West Bank）のナブルス（Nablus）でユダヤ教の祭り「仮庵祭（Sukkot）」用に建てられたSukka（仮庵、仮設の家）の内部。この祭りでは仮庵をさまざまな果物で飾る。〕

この祭はまた、（秋の）収穫祭であると同時に、イスラエルの苦難を記念する日、出エジプト後の４０年間の荒野の放浪を記念する祭でもあります。レビ記２３章４２－４３節にそれが規定されています。「23:42 あなたたちは七日の間、仮庵に住まねばならない。イスラエルの土地に生まれた者はすべて仮庵に住まねばならない。23:43 これは、わたし(神)がイスラエルの人々をエジプトの国から導き出したとき、彼らを仮庵に住まわせたことを、あなたたちの代々の人々が知るためである。わたしはあなたたちの神、主である。」

イスラエルの人々は、粗末な仮庵（＝仮設の家）に寝泊まりすることによってイスラエル民族の苦難を追体験したのです。この仮庵祭はギリシア語では〈スケノペーギア〉と呼ばれますが、この言葉は、二つの言葉、〈スケネー〉（幕屋､天幕、テント)という言葉とペーグニュミ(据える、設ける、設営する)という言葉の合成語なのです。ヨハネ福音書の１章１４節は「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた」と語るときに、この天幕、テントという言葉を動詞にして使っています｡つまり｢言は肉となって、わたしたちの間にテントを張られた（仮庵＝仮設の家に宿られた)｣。主イエスは、わたしたちの救いを達成するために、この世界という仮庵に宿り苦難を経験され、最後は人間の罪を負って十字架の苦しみを忍ばれたのです。その苦難の故に、わたしたちに救いがもたらされたのです。

エル･グレコ｢福音書記者ヨハネ｣

仮庵祭は「水と光の祭典」とも呼ばれると申しました。ユダヤ教の「ミシュナ」（⇒タルムード）

という経典には仮庵祭のとき、毎日シロアムの泉〔新共同訳「シロアムの池」〕から金の器に水を取って、これを祭壇に注ぐ儀式が行われていたことが記されています。これは通常この祭りの後２、３週間後に降り始める「前の雨」を呼び込む降雨儀礼(雨乞いの儀式)であります。(『旧約新約・聖書大辞典』教文館、1989)。荒野の民にとって水は生命を意味します。荒野は水がふんだんにあふれているところではないのです。水を確保するということは、民の存続にとって必須のことであると同時に、非常に困難を伴うことでもあったのです。かつて荒野を旅するイスラエルの人々が水の不足に苦しみ、モーセに苦情を突きつけたとき、モーセは現状を神に訴えます。すると神はモーセにこういわれました。民数記２０章８節。20:8 「あなたは杖を取り、兄弟アロンと共に共同体を集め、彼らの目の前で岩に向かって、水を出せと命じなさい。あなたはその岩から彼らのために水を出し、共同体と家畜に水を飲ませるがよい。」

シロアムの泉(池)

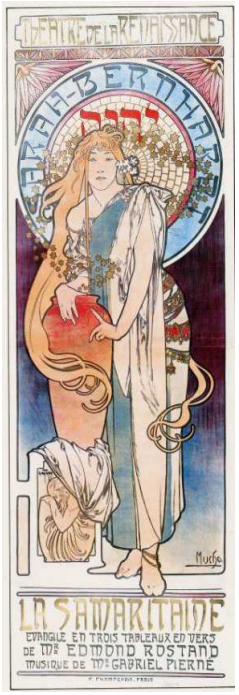
仮庵祭が収穫祭であると同時に、イスラエルの荒野の苦難を想起する祭であるのは、苦難の中でも水に恵まれ、水と光の結晶としての作物に恵まれ、神への感謝が献げられる時だからなのです。

この喜びの祭が最高潮に達する祭の最終日、人々は神殿へと川の流れのように、ぞくぞくと集まってきます。その時、主イエスは立ち上がって祭に参集した人々に向かって言われたのでした。聖書はこう書いています。「7:37 祭りが最も盛大に祝われる終わりの日に、イエスは立ち上がって大声で言われた。「渇いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。」祭を背景にして、主イエスはみ言葉を人々の心に刻みつ

仮庵祭が最終日を迎え

けるのです。荒野の旅においては、飢え（パン[命のパン６章]の不足）と渇き（水[霊７章]の不足）によって人は死ぬのです。主イエスはこの７章の直前の６章で自分を「命のパン」と宣言し、この７章では「命の水」として自分を提示するのです。主イエスの論法は鮮やかです。

日常的な「水」から、非日常的な「水」（魂の水・永遠の水・心から溢れて他を潤す水／人の内から流れ出す生きた水の川）へと鮮やかに展開していきます。サマリアの女の場合と同じです（ヨハネ4:13-14）。主イエスは、サマリアの「ヤコブの井戸の水」にこと寄せてこう言います。４章１３－１４節。4:13 …「この水（ヤコブの井戸の水）を飲む者はだれでもまた渇く。4:14 しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。」本日の個所では、「シロアムの泉（池）から汲み取られて、祭壇に注がれる水」ことよせて、こう語られました。「7:38 わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる。」泉や川は流れ出て人々の渇きを癒す、また作物に実りをもたらす「根源的要素」であります。



ミュシャ「サマリアの女」（1897）

主イエスの論法は日常的な喉の「渇き」から魂の「渇き」へと展開しています。現代は「渇き」に満ちた時代であります。①豊かだけれど崩壊し、争いの場と化する家庭。一方で格差社会のなかで、増大する希望なき人々。「姥棄（うばす）て社会」と称されるような、貧しい老人を切り捨てる社会制度。②一人の人格として認められない渇きは、人を一人の人格と見る感覚を摩耗させるのです。かつての秋葉原無差別殺人事件の犯人は、殺すのは、「誰でもよかった」と語ったのです。取り調べの中で、彼が育ってきた家庭環境、通ってきた職業的冷遇が明らかになります。己の絶望は、人の絶望を望むのです。絶望が他人を絶望へと道連れにするのです。絶望が絶望を産みだすのです。また一方的に③価値

観を押しつけられることによってもたらされる人格破壊。そしてさらにそれを起因として生じる家族同士の殺人（子が親を、親が子を）。

皆さんは「附属池田小事件」という児童連続殺傷事件を覚えておられるでしょうか。２００１年６月８日、大阪府池田市にある大阪教育大学附属池田小学校〔大阪のエリートコースの１つ〕に男が乱入し、刃物で次々と切りつけ児童８名が殺害され、教師を含む１５人が重軽傷を負った事件です。小学校を襲撃するという前代未聞の衝撃的な事件でした。犯人の宅間守（当時３７歳）元死刑囚はその場で取り押さえられ、逮捕され、後に死刑に処せられます。彼は供述調書の中で、こう語ります。「私の苦しい思いを、できるだけ多くの人にわからせてやろう。」「死刑覚悟で小学生を多数、殺すしかない。」そして、犯行直前に自宅近くの刃物店で出刃包丁を購入。車で池田小に向かい、犯行に及びます。その時の模様を宅間元死刑囚はこうも語っています。「捕まえられるまで刺し続けるつもりでした。できるだけ、多くの人を刺そうと考えていた。」「目についた子供を手あたり次第、刺した。」「ブスブスとエリートの卵を刺し続けた。」「自分みたいにアホで将来に何の希望もない人間に、家が安定した裕福な子どもでもわずか5分、10分で殺される不条理さを世の中に分からせたかった。」彼は小学校から中学に進むときに、大阪教育大学附属池田中学校への進学を希望します。しかし学力が不足しているという理由で、受験を許可してもらえませんでした。

大阪教育大学附属池田小学校

彼は公務員として小学校の事務職で勤務していたこともあった人ですが、子どもたちへの愛着を覚えることもなく、池田小学校の児童が、自分とは対照的に将来を約束された社会階層の延長線にいる

年少のエリートにしか見えなかったのです。「世の中勉強だけちゃうぞ、と一撃を与えたかった」とも語っています。宅間元死刑囚は、傲岸で、裁判の席でさえ遺族や傍聴人に罵詈雑言を浴びせることをやめず、裁判の判決が下るその日にも法廷で、「ちょっと、言わせてくれ。死刑になるんやろ。これまでおとなしくしてたやろ！」と、自分に話をさせるように騒ぎ立てて退廷させられ、自分の判決を聞くこともなかったのです。幼い子供たちの命を奪うという残忍な犯行のみならず、こうした彼の常軌を逸した暴言や暴挙の数々によって、彼は凶暴で制御不能な怪物（モンスター）のような印象だけしか残しませんでした。しかし彼が死刑確定後、獄中で一人の女性との文通を通して人への愛情を回復し、やがて獄中結婚をし、処刑後は大阪市内のキリスト教会で葬儀がなされたということは余り知られていません。もちろん妻の姓名も、教会の名前も公にされていません。そうすれば、大勢のマスコミや興味本位の人々が押し寄せるだけでなく、非難の嵐にさらされ、社会的制裁を受けることが目に見えていたからです。彼の心にどのような変化が起こっていたのかは確かめようがありませんが、死刑執行の直前に彼は「『ありがとう、と僕が言っていた』と、妻に伝えてください」という言葉を刑務官に託して刑場の人としてその人生を終えました。

人の心は生きもし、死にもするのです。まことの生命を維持する命のパンと、生命の水を与えるてくださるのは主イエス・キリストです。６章２７節で、永遠の生命に至るパンを示し、４章１４節で永遠の生命に至る水を示し、さらに今日の７章３８節でキリストを信じる者の内から「生きた水が川となって流れ出る」と語られるのです。人は主イエスの内に再び生きる可能性を持っているのです。信仰のスイッチが入ると人は変わり始めるのです。

信じる者は生きるのです。これがキリストのメッセージです。「わ

たしを信じる者は、たとい死んでも生きる。また、生きていて、わたしを信じる者は、いつまでも死なない」というヨハネ福音書１１章２５－２６節の禅問答のように難解に思える言葉は――いつも言いますように――きわめてシンプルなメツセージを伝えているのです。つまり「信じる者は生きる」ということなのです。聖書は人間の自然的・生物学的生命を〈ビオス〉と呼びます。わたしたちの生物としての生命は無限ではありません。いくら壮健な人でもやがては死ぬのです。一方で聖書はもう一つ生命という言葉を持っています。〈ゾーエー〉という人格的生命を意味する言葉です。〔「霊的生命」と訳したいところですが、かえって分かりずらいので「人格的生命」と訳しておきます。〕わたしたちの自然的生命は、死に絶えても、信じる者の人格的生命は神によって生かされ、生かされることによって人をも生かすものとなるのです。「生きた水が川となって流れ出る」のです。

主イエスがこの「生きた水」が聖霊のことをさして語っておられることが最後の節から分かります。３９節。「7:39 イエスは、御自分を信じる人々が受けようとしている〝霊〟について言われたのである。イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、〝霊〟がまだ降っていなかったからである。」

来週は聖霊降臨日（ペンテコステ）です。この世界に聖霊が降ったことを記念する日です。主イエスは、弟子たちをこの地上に残して、父なる神の許に帰るとき、「14:18 わたしは、あなたがたをみなしごにはしておかない」（14:18a）と言われたました。主イエスはこの地上を歩むわたしたちに、ふさわしい助けを用意しておられるのです。それが聖霊です。聖霊は、１４章１６節で「別の弁護者」とも呼ばれています。「弁護者」と訳されております〈パラクレートス〉というギリシャ語は、〈パラカレオー〉「そばで声をかける」（「そばで呼びかける」）という言葉から作られた言葉です。ですから〈パラクレートス〉を直訳すると「そばで声をかける者」（「そばで呼ぶ者」）という意味で

す。口語訳や新改訳が「助け主」と訳しておりますのは、〈パラクレートス〉を弁護のためだけではなく、慰めを与え、励ましを与える、広く「助けを与える存在」として理解しているためです。この助け主(弁護者)は、「別の助け主(弁護者)」と呼ばれています。「別の」という言葉〈アロス〉は、同じものでもう一つのという意味です。「コーヒーをもう一杯」と言うときの、同じものをもう一つという意味です。つまりこの「助け主」の働きは、イエス・キリストが与えてくださった助けと同種のもう一つの助けだということです。ここには、イエス・キリストの助けの業の継続性が暗示されています。

さらに〈パラクレートス〉を聖書の中に追跡していきますと、実は、この〈パラクレートス〉は主イエスご自身を指す言葉としても用いられるのです。ヨハネの手紙

一２章１節。「2:1 わたしの子たちよ、これらのことを書くのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。たとえ罪を犯しても、御父のもとに弁護者（パラクレートス)、正しい方、イエス・キリストがおられます。」聖霊も〈パラクレートス〉、イエス・キリストも〈パラクレートス〉なのです。この〈パラクレートス〉の到来、「真理の霊」の到来において、わたしたちは〔再来の〕主イエスに出会うのです。「わたしは、あなたがたをみなしごにはしておかない。あなたがたのところに戻って来る」（18節）と言われるのはそのためです。教会は聖霊において主イエスを見るのです。

主イエスは世を去るに当たってこう言われました。ヨハネ１３章３４－３５節「13:34 あなたがたに新しい掟（戒め）を与えましょう。あなたがたは互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、そのように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。13:35 もしあなたがたの互いの間に愛があるなら、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです」

（新改訳）。わたしたちを愛するがゆえに、主イエスは十字架に生命を捧げられたのです。今読みましたのは、十字架上にその愛を現された主が与えてくださった最も大切な「掟」です。聖霊はその愛が全うされていくことを助けてくださるのです。聖霊の働きは、何か機械的に働く力ではありません。愛を通して人格を作りかえる力として働くのです。

教会はこの聖霊によって生かされ、導かれ、愛の果実を結んでいく共同体なのです。こうして教会は、聖霊において主イエスの愛の業を継続していくのです。教会は様々なことを計画するでしょう。しかしその計画は主イエスの愛の業を継続するものでなければなりません。教会は様々な奉仕をするでしょう。その奉仕も主イエスの愛の業を継続するものでなければなりません。教会は制度を変え、組織を整えていくでしょう。その組織も主イエスの愛の業を継続するものでなければなりません。そのために、主イエスの力、聖霊の力がわたしたちを導き、わたしたちを力づけ、ことを実現に至らせてくださるのです。

この事を実現するために、主イエスは苦難をも身に負われたのです。その苦難を覚えつつも、主イエスがわたしたちをどこに招いておられるかしっかりと確認しましょう。「渇いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。」この主イエスの言葉の背景に、祭があったことをもう一度思い出しましょう。主イエスは、祭を背景にして、これを生命と喜びを生み出すメッセージとして語っておられるのです。ペンテコステに向かう１週間、祭を待つ期待と喜びをもって歩みたいと思います。新しい１週間の歩みのために祈りましょう。

2020. 5. 24　日本基督教団千歳丘教会礼拝